

# 中井正一における〈性格〉論の諸相

門 部 昌 志

Essais sur le Caractère chez Masakazu NAKAI

Masashi MOMBE

**要旨：**美学者中井正一の論文では、一般的な意味とは違う仕方で、「性格」という言葉が用いられることがある。一方では、人間と機械の複合に伴う、映画のレンズやフィルムの感覚知覚に対する影響を指して「物理的集団的性格」のように用いられる。他方では、身体運動における共同存在を指して「集団的実存的性格」が語られる。機能概念論的な文脈で「性格」という語が用いられる場合もあれば、存在論的な文脈で用いられる場合もある。本稿では、辻部政太郎の組織論や戸坂潤の概念論を補助線としつつ、美学者中井正一の論考を再読する<sup>1</sup>。個人と集団など、性格という言葉が埋め込まれる図式的対比の説明とともに、図式的対比では捉え難い議論がなされていることも確認する。本稿執筆にあたっては、全集に収録された中井の論考に加え、彼の直筆原稿や構想メモについても部分的に勘案し、中井の〈性格〉論における顕著な議論の一側面を粗描する。

**キーワード：**中井正一、物理的集団的性格、集団的実存的性格、性格

## 1. 中井正一における物理的集団的性格

美学者中井正一の著作はコミュニケーション論、そしてメディア論の古典的著作として読みうる。1931年、美学者中井正一は同人誌『美・批評』の5月号に論文「物理的集団的性格」を掲載した。資本主義的な形態をとっているものの、会社、工場、新聞や雑誌など、交渉は「集団的性格」を単位とする時代になっていた。「物理的集団的性格」では、とりわけ1) 映画の「製作の過程」が集団的であることが注目される<sup>2</sup>。これは「集団的性格」と呼ばれる。次に、2) 映画製作の「形式」は機械性と人間性の複合からなっている。これが「物理的集団的性格」と呼ばれる。一方では、物理的集団的性格を構成する機械などは社会的集団的性格によって生産される。他方では、社会的集団的性格に物理的集団的性格が影響を及ぼすとされる。

<sup>1</sup> 中井再読にあたっては、まず美術出版社版の『中井正一全集』で「性格」の使用例を確認しつつ、年表を作成する作業を行った。各論考を精読し、引用する段階で、初出原稿の複写等を活用した。一部の直筆草稿やメモについては京都大学大学文書館所蔵資料の電子ファイル版で確認を行った。

<sup>2</sup> タイトルにおける「物理的」の箇所が抹消され、「映画に於ける物理的集団的性格」と書かれた草稿がある。京都大学大学文書館識別番号：(中井8-9)「映画に於ける物理的集団的性格」

レンズやフィルム、真空管には各々特徴があるが、機械性と人間性の複合からなる映画製作過程の中で、それらの機械の影響が感覚の中に「浸入」する。レンズやフィルムや真空管は、いわば組織や集団の「神経組織」とも考えられる。それらは「眼であり耳であり喉である」。そのみならず、フィルムは知覚の「記憶者」であり「再現者」でもある。このように、1930年代初頭の論考のなかで、中井は、映画における集団的製作の過程やそれに由来する知覚の変容を論じていた。彼は、今日、私たちが想定するメディア論的な議論を、まさに集団的に制作される雑誌上で、活字を通じて提示していた。

「物理的集団的性格」に関する中井の議論には、機能概念、あるいは関係論的な発想が伴っており、アナログ的な関係論的情趣が想定されていた。実体としての主体や実体としての対象の間で感情移入が成立すると考えるのではなく、中井はこれを関係論的に再考する。個人は組織や集団の関係の一部として捉えられた上、全組織中の一コマの映像に見入ることで感じられる関連の相似性<sup>3</sup>、それに由来する情趣について中井は論じた。

中井の論文「物理的集団的性格」の発表された1931年の3月には、辻部政太郎が「集団的性格の断片」を『美・批評』に発表していた。つまり、中井の論文「物理的集団的性格」に先だって、辻部の論文「集団的性格」が同じ雑誌に掲載されていたということになる。タイトルのみに焦点を絞れば、一見、辻部論文の「集団的性格」という用語を中井が部分的に受け入れて「物理的」という語を付加して返答したように思われる。しかし、論文タイトルのみならず、論文の内容を考慮し、視野を広げて時代を遡れば、多様な関係が視界に入る<sup>4</sup>。

第一に、辻部の集団的性格論の前に中井は「集団美の意義」を書いており、辻部の集団的性格論には中井の「集団美の意義」に言及した箇所もあった。「集団的性格」というタームは用いていないものの、中井は、「集団美の意義」(1930年)のなかで、『『レンズの眼』の見いだす美わしき、あるいは芸術は、集団の性格の見いだす美わしきであり、集団の性格が創りだす芸術となる』と述べていた<sup>5</sup>。ここでは、レンズによって成立する集団美ないし集団的芸術が、「性格」という語を用いて論じられている。これを考慮すると、内容からすれば、これは、先に述べた「物理的集団的性格」(1931年)で中井自身が記した構想を部分的に先取りする一節と考えられる。更にさかのぼれば、芸術の領域における、メディアを介した新たな知覚に関する着目は、1930年の「機械美の構造」(『思想』2月号)でも、「性格」という語を用いて論じられていた。「それは一つの新しい『見る性格』の出現である。そしてこれまでの天才の個性並に創造の中に見出したものより異なる他の見方である、言ひ換へれば即レンズの見方なのである」。精緻で鋭利な「切れた感じ」を喚起するレンズの見方の浸透は、映画の領域のみで論じられたのではなく、多様なジャンルにおいて指摘されていた。「この『冷たい視覚』の『人の視覚』への浸透、これが最近の芸術、建築、絵画、彫刻に於ける大きな動きの一つではあるまいか」<sup>6</sup>。1930年の論考「機械美の構造」においても既に、複数の芸術ジャンルにおいて、レンズの見方ないし「冷たい視覚」が人間に浸透すること、こうした事態を中井は、「個性」が「集団の『性格』」を模倣する、と独特な表現で論じていた。

<sup>3</sup> 絵画の場合は一枚の絵画と個人が向き合っていたが、映画の場合はフィルムの全体と一コマの映像と集団の中の個人が向き合う。

<sup>4</sup> 中井自身の論文ではなく、知人の論文を参照しつつ、議論を進めることは中井研究の周辺を過度に重視していると見なされる可能性もある。ただし、文献の参照関係を顕在化することに加えて、集団的制作という観点から中井の論考を読むという意義もある。

<sup>5</sup> 中井正一『中井正一全集2』美術出版社、1981年、180頁。

<sup>6</sup> 中井正一「機械美の構造」『思想』1930年2月号、63頁。

中井による「機械美の構造」（1930年）や「集団美の意義」（1930年）の後、辻部による「集団的性格の断片」（1931年）が書かれる。辻部における「集団的性格」とは、「意思と統制と行動を帯てる組織体」である。「国家、都市、軍隊、会社、銀行、学校、新聞社」などが例となる。最大のものは階級であるが、中単位や小単位などを含めると、その規模は多様である。かつては「個の完成の時代」だったとすれば、現在は「個の解消」から群結成に向かう時代であるという展望のもと、辻部はとりわけ雑誌や新聞などを「集団的性格の断片」の中で論じている<sup>7</sup>。つまり、主に雑誌や新聞に注目した、辻部による「集団的性格の断片」の後、今度は、映画に注目した中井の論考「物理的集団的性格」が同じ『美・批評』に発表されたことになる。内容的隔たりもあるが、両者は、複雑な応答の関係にあると思われる<sup>8</sup>。例えば、「物理的集団的性格」で辻部の論考に反応したかのような議論を展開した後、中井は、「気質」論では、組織体を指す辻部の意味とは異なる意味で「集団的性格」を論じている。あえて別の意味をこめて同じ用語が用いられたかのようなのである<sup>9</sup>。

「物理的集団的性格」の発表と同じ1931年、中井は「芸術の人間学的考察」のなかで、部分的に類似したテーマを扱いながら、類型性と標準性の論点を論じている。中井によれば、絵画の中にも「レンズとフィルムの見方」を受け入れたものがあつた。そのレンズとフィルムの見方には、「標準性」があり、「年次的な類型性」がある。したがって、物理的集団的性格、すなわち機械性と人間性の複合を通じて人間に浸透するレンズとフィルムの見方の影響は、「集団的」人間の「類型」的な見方を個人が受け入れることとなる。換言すれば「集団的性格が個人的個性に滲透するのである」<sup>10</sup>。この箇所では類型性の論点に加えて、集団的「性格」と個性の対立ではなく「滲透」が論じられていることに留意しておきたい。

## 2. 戸坂における性格概念と中井における機能概念

辻部の「集団的性格の断片」を勘案しつつ、中井の「物理的集団的性格」論を中心に彼の性格論を辿ってきた。中井における〈性格〉論を考える際、さらなる背景の一つとして、戸坂潤による「性格」概念論を考慮する必要がある<sup>11</sup>。

1930年6月、戸坂潤の『イデオロギーの論理学』が刊行され、中井は書評で同書を扱った<sup>12</sup>。『イデオロギーの論理学』の巻頭論文は『「性格」概念の理論的使命——一つの計画に就いて——』である。これはもともと、1928年11月に発行された雑誌『新興科学の旗のもとに』第一巻第二号

<sup>7</sup> 辻部政太郎「集団的性格の断片」『美・批評』1931年3月号。

<sup>8</sup> 『美・批評』における辻部と中井の連携、及び「集団的性格」と「物理的集団的性格」についての先行研究としては山田宗睦「《日本の思想雑誌》『美・批評』、『世界文化』、『思想』1963年8月号がある。

<sup>9</sup> 『美・批評』に投稿した「気質」の中で中井は、集団的性格ないし気質の類型を時間軸や空間軸を手がかりとして整理している。例えば、同時代的な対立的性格ないし気質（儒者、遊人）、歴史的イデオロギーの観点からの対立性格ないし気質（公卿、武士、町人、職人）、時間的な人間的対立性格ないし気質（娘、息子、親父、老人、隠居）、空間的な対立性格ないし気質（江戸、上方）などである。一見、人間性に触発された類型論のようであるが、異なる気質間の「交錯と交代」、あるいは「指導的ヘゲモニー」など社会的な議論も展開されている。なお、戦後の論考「農村の思想」で中井は農民の「矛盾的性格」を論じている。

<sup>10</sup> 中井正一「芸術の人間学的考察」『理想』1931年10月号、111頁。

<sup>11</sup> 戸坂も中井も「個性」より「性格」を重視した。両者の性格論が展開される前の1922年、三木清が「個性の問題」から出発していたことがどれほど二人に影響を及ぼしたのかは定かではない（三木清「個性の問題」『三木清全集第二巻』岩波書店、1966年）。なお、中井の場合、戦後に「三木君と個性」を発表している。

<sup>12</sup> 中井の書評では、内容的な政治性や時代性といった意味合いで「性格」という語が用いられた。

に発表された論文であった<sup>13</sup>。いずれにしても、中井の「物理的集団の性格」、及び辻部の「集団の性格の断片」以前に、戸坂の「性格」概念論が発表されていたことになる。もともと、同じ「性格」という言葉を用いているとはいえ、概念内容の相違を考慮すれば、中井に対する戸坂の影響は確定し難い。ただし、中井による論考のタイトルや論文中で用いられる用語の中に、また構想メモや草稿で「性格」という言葉が用いられる傾向があるため、考慮すべき背景の一つとして、「『性格』概念の理論的使命」の論点を確認しておきたい。

「性格」という言葉は、一見、「個性」と類似しているが、戸坂は両者を対照的に捉えている。だが性格概念について説明する前に、私たちはまず戸坂における個性や個物の位置づけを検討する必要がある。彼によれば、私たちが継承している理論的遺産のなかで最有力の概念は「普遍者」である。理論が論理的であろうとすれば、普遍者と関連せざるをえない。さらに、普遍者ならざるものが「引き出される」ために、まず普遍者から出発せねばならないという事情もある。こうして、普遍者は最有力の概念となり、特殊者ないし個別者は第二に有力なそれとなる。この時、普遍者から特殊者ないし個別者を「引き出す機能をもつ媒介者」が、戸坂によれば、個別化の原理である。個別化されることによって普遍者は特殊者となる。個別化の終点となるのが「個物」であり、その「個性」である。この個物ないし個性が第三の根本概念となる。

戸坂によれば、「外延的なもの」ないし連続の上で、「限定されたもの」が「個物(個性)の最初の規定」となる。個物は、限定されたもの、限界をもつものとして、現れる。ある事物と他の事物の連続を仮定した上で、事物の連続のなかに「限界」を見つけ、事物を「区別」することによって人は、個物や個性を知る。原子に到達すると、個別化の原理は動きを止める。これ以上、分割も個別化もできないものが原子である。それが個物(In-dividuum)であり、モノドである。

このように、個物ないし個性は、個別化の原理の「終点」において現れる。したがって、個物と個性の概念を理解するには、その背景として個別化原理を必要とする。これに対して、性格の概念の成立は、個別化原理とは独立したものである。なぜなら、性格概念は、限界や分割とは関係がないからである<sup>14</sup>。では、戸坂の提示する「性格」概念とはどのようなものか。モノドロロジーや個別化原理を経過した彼が提示する性格概念とはいかなるものであったのか。

戸坂によれば、言葉としての「性格」の「原始的な意味」は「刻印」である。例えば、日常的な事物の性格は、その事物が持つてはいるが、付与された刻印のことである。これに対して、ある事物の「本質」は、それ自身に備わっており、それを付与する人々から独立している。与えられた刻印としての「性格」は、その刻印を付与する「人々への関係を含むことによつてのみ成立する概念である」<sup>15</sup>。

日常的に私たちが接する事物には様々な性質がある。ある性質は顕著なものであり、別の性質はそうではない。何が顕著であるかは事物だけで決定されるのではない。顕著とされる特定の性質は、視角に応じて、異なる。性格は事物の「支配的な性質」である。「事物の性質AがBC……を代表する時、顕著なるこの性質Aはその事物の性格となるのである」<sup>16</sup>。どの性質が選ばれて性格とされるかは「政策」ないし「理論的計画」に関連する。実践的な取り扱いを通じて、事物

<sup>13</sup> 同じ第一巻第二号では、佐竹繁夫が「バルビュスとマルクス主義」を論じている。『ヴァンドルディ』の前身である雑誌モンドを率いるバルビュスに向けた辛辣な批判を含んでいる。一ヶ月後の第一巻第三号では、かつて個性研究から出発した三木清の「有機体説と弁証法」が巻頭に掲載されている。なお、『新興科学の旗のもとに』については、信山社の復刻版を参照。

<sup>14</sup> 植物と動物の「限界」が与えられない場合でも、日常生活においては、概略的に性格を理解することで充分である。

<sup>15</sup> 戸坂潤『イデオロギーの論理学』鉄塔書院、1930年、9頁。

<sup>16</sup> 同書、13頁。

の性質が明らかになる。性格が意味をもつのは「実践に於てのみ」である。そして事物の性格は「事物の歴史的運動に寄与」すべきことが強調される<sup>17</sup>。

1930年6月、鉄塔書院より、戸坂潤の『イデオロギーの論理学』が刊行される。同年8月、一時は「会えば必ず闘う論敵」であった中井が『哲学研究』誌上にて同書の書評を発表する。「性格的論理、すなわち内容的な政治的形態による論理」という言い換えに、中井における、性格概念の捉え方が滲み出ている<sup>18</sup>。中井は、時代性を持つ問題が性格的であること、時代が問題とする限りで問題は性格的であることも踏まえていた。ただ、基本的な姿勢としては、戸坂の論理を「政治的傾倒」とし、中井自らは自然科学の重要性に注意を喚起した。

『「性格」概念の理論的使命』を巻頭に収録した<sup>19</sup>、戸坂の『イデオロギーの論理学』が刊行された1930年には、中井は、その書評のみならず、「集団美の意義」や二篇にわたる「機能概念の美学への寄与」を発表している<sup>20</sup>。『哲学研究』に掲載された「機能概念の美学への寄与」では、実体概念から機能概念への転換が説かれている<sup>21</sup>。従来の論理学では、まず、「個々独立の物」があるとされ、それらの物に共通の性質が「抽象」される。そして同じ性質をもつ物体を「一つの類」のもとに包摂する。この過程を進めることで、概念ピラミッドが現れる。だが、その頂点となるのは、或る物という空疎な言葉にほかならない。中井の機能概念論は、最終的には無内容な言葉に行き着く実体概念的発想から機能概念への移行を唱えるものであった。例えば、窓の概念の場合、様々な窓の記憶表象の重複と忘却による抽象化ではなく、「照明、通風、展望度」の「函数的複合体」が窓の機能概念となる<sup>22</sup>。機能概念はまた、主観／客観などのように、「函数的関連のもとにある分離すべからざる要素」を分離し対立したものと考える、固定的な二分法のあり方を批判するものでもあった。「機能概念の美学への寄与」の中では、過去の状態に対して現在の状態は客観的となり、未来の状態に対して現在の状態が主観的になるなど、比較されるものに応じて転換が生じる、カッシーラーの発想が論じられていた。

もともと、本稿で確認したいのは機能概念論への移行というよりむしろ、戸坂と中井における概念論の対照性である。戸坂が批判の対象とした議論では、普遍者から出発して個物（個性）へと至る概念論になっていた。これに対して、中井の機能概念論で批判の対象とされた議論の前提は「個々独立の物」から出発して或る物に到達する議論であった。批判の対象に関する説明においてではあるけれども、普遍者から出発する議論と個物から出発する議論など、前提となる発想が両者では極めて対照的である<sup>23</sup>。

ただし、中井の「機能概念の美学への寄与」において、「性格」という言葉が用いられる箇所がある。中井は身体を「機能の複合体」とする。人の跳躍と飛行機、遊泳と船、眼とレンズ、鼓

<sup>17</sup> 同書、17頁。

<sup>18</sup> 中井正一「戸坂潤著『イデオロギーの論理学』」（書評）『中井正一全集1』美術出版社、1981年、367頁。

<sup>19</sup> 2018年1月には、巻頭論文として『「性格」概念の理論的使命』を収録した林淑美編『戸坂潤セレクション』（平凡社）が刊行されることとなった。

<sup>20</sup> 1930年1月の日付で閉じられる「文学の構成」のなかで、中井は、ハイデガーの性格論に言及していた。なお、戸坂の『イデオロギーの論理学』刊行は同年6月である。

<sup>21</sup> 中井の機能概念論については、学位論文を含めて、これまで何度も取り組んできた主題である。要約的な議論としては以下がある。門部昌志「中井正一再考—集团的思惟の機構について—」『県立長崎シーボルト大学研究紀要』第3号、2002年。機能概念についてのより詳細な議論としては次がある。門部昌志「中井正一と概念の問題」『研究紀要』第14号、2014年。

<sup>22</sup> 中井正一「委員会の論理（中）」、『世界文化』1930年2月号、32頁。小学館の復刻版を参照。

<sup>23</sup> 三木清の「個性の問題」では、「具体的普遍」というヘーゲルの思考が論じられるが、最終的には個性の基礎付けに至らないとして限界が指摘される。「普遍的なものほど具体的である」という発想は中井の展開した実体概念論の発想とは対照的であり興味深い。三木清「個性の問題」、『三木清全集 第二巻』岩波書店、1966年、132-133頁。

膜と声帯とラジオなどのように、身体の機能は、道具や機械によって、拡大されてきた。表現と知覚は個人を越えて集団的な社会性を帯びたものとなり、身体は、「社会的集団構成」のなかに「浸潤」する。「今は性格の名をもつて基準とする集団性が巨大なるその外貌をあらはすに至る」<sup>24</sup>。道具と機械によって身体諸機能は拡大され、表現と感受のあり方が個人的意識を超える、そのようなあり方が「性格の名をもつて基準とする集団性」として記述されている。主題としては「物理的集団的性格」に通じる内容と思われるが、視覚だけではなく、技術的物質によって媒介された知覚や身体運動を含めて記述されている点が特徴的である。

戸坂の性格概念論が著作の一部として刊行され、中井がその書評を書いた同じ1930年に、中井は機能概念論を提示した。批判の対象とする概念論の説明の仕方は両者とも対照的であったにもかかわらず、中井は、「性格」という言葉を用いた。ただし、それは、戸坂の「性格」概念を内容的に継承するものとは別種の議論であった。1930年には、論考「文学の構成」のなかで、中井は、既にハイデガーの性格論に言及していた<sup>25</sup>。また、後には、「物理的集団的性格」などに見られるように、独自の内容を盛り込みながら、中井は彼自身の性格論を断続的に展開していったように思われる。

ただし、一見、やや不十分と思われる箇所もある。映画をめぐって展開された「物理的集団的性格」論では、絵画と映画、人間と機械、個人と集団、個性と性格、個性と類型性、そして実体概念と機能概念など多様な対比のなかに「性格」という言葉が埋め込まれて用いられる傾向があると思われる。しかし、性格論と中井が結びつけた機能概念は、関係論的であるのみならず、固定的な二分法を批判する発想をも含んでいた。例えば、機能概念ないし関係論的思考を基調とする「物理的集団的性格」の場合、また二分法批判が敢行される「機能概念の美学への寄与」においてさえ、性格論が展開される文脈では、二分法批判に達することなく、個人と集団、個性と性格などの対比として読まれ得る箇所がある。機能概念論の見地からすれば、個人と集団など、「性格」という言葉の埋め込まれる対比それ自体を再考することになるはずである。だが、このように考える場合、個性と性格について論じる際、中井が「浸潤」や「滲透」といった用語を用いていたことも考慮すべきである。これらの用語によって、個性と性格の二分法的対比としてではなく、異なるものの二重化として読みうる余地があるのではないかと考えられる。また、中井による性格論のなかで、相互転換的思考が活用されている例があることについては後述することとする。

### 3. 集団的実存的性格

以上、中井の論考「物理的集団的性格」をめぐって、戸坂や辻部の論考との関連で考え得ることを概略的に述べた。「物理的集団的性格」では論文タイトルに「性格」という語が埋め込まれていた。これに対し<sup>26</sup>、タイトルではなく論文中で「性格」に関わる用語が頻繁に用いられるのが論文「スポーツ気分の構造」である。1933年の『思想』に掲載されたこの学術論文では、主として、スポーツをする者の感じる気分が、「性格」という言葉を用いた多様な造語によって論じられていくことになる<sup>27</sup>。

<sup>24</sup> 中井正一「機能概念の美学への寄与」『哲学研究』1930年11月号、75-76頁。

<sup>25</sup> 原稿の末尾に書かれた日付によれば、「文学の構成」は、1930年1月に脱稿されたようである。

<sup>26</sup> 中井の「現代における美の諸性格」(『理想』49号)においても、タイトルに「性格」という語が埋め込まれており、論文中の一部分(第七節)で「性格」が幾度も用いられている(「利潤の企画が成生するところの非人間的性格の所産」など)。論じられたのは、利潤対象としての大衆性に関わる主題である。

<sup>27</sup> 選手ではなく、競技を見る観客のスポーツ気分も、やや批判的にはあるが、論文の末尾で扱われている。中井は、タイムやスコアよりも「実存の内底」を重視している。

第一は、スポーツ気分のもつ「空間的性格」である。中井によれば、グラウンドに入った選手は、白線や曲線、そして楕円などを前にして緊張し興奮するという。ここでは物理的空間は、「追抜き、到達しつくすべき存在的距離」となっている。つまり、グラウンドの線や曲線を前にして感じられる緊張した気分には、間隔を「距離的性格」に転換するような契機があるのである。それは、「範疇的性格を実存的性格に転換するところの中間的性格をもつてゐる」<sup>28</sup>。このように、スポーツ気分には、単なる間隔を到達すべき距離に転換する「空間的性格」があるとされる。

第二に、方向に関わる問題がある。「射的及び弓術」を典型的な例として、ビリヤードのキュー、野球のバッテリー間の線などにおいて、「単なる方向」を変化させる「集中的緊張的気分」がある。弓術の場合、心的ないし身体的動揺を消し去って、一つの的の方へと弓が引き放たれる。この一点に向かう心に対して、スポーツには、「方向転換」ないし「カーヴの次元」もある。ボートにおけるS字型コースを始め、ランニングやスキー、スケートなどのコースが醸し出すスポーツ気分は「二次元的空間的性格」である。

第三に、スポーツのチームにおける「集団的実存的性格」がある。スポーツでは、「シートを守る」、「シートに着く」、シートとシートの間合い、ないし間をとる気分がある。その際、自己は、シートないしポジションの機能や部署に応じて、「共同相互存在としてのみその存在の意義をもつ」ようなあり方をしている。ボールが放たれる時、二つのチームのラガーたちは二方向的に対立しつつも動的に変化する。このように、動的に変化する相互の共同性としてのチームのあり方が「集団的実存的性格」と呼ばれる。

第四は、スポーツ気分における「肉体的技術的性格」に関連する。「呼吸」や「こつ」、そしてフォームをめぐる問題である。練習が深まるにつれてスポーツをする者は「深い謎」に対峙するようになる。その「『判らなく』なつた期間」がスランプである。ただし、山を越え、谷を越えるとフォームは成熟に向かう。叱られた後や猛練習の後にふと判る時が到来する。「ハハアこれだな」という際の「これ」は、「被投的投企」に関連する。しかし、それを言葉によって語ることは困難であり、「…としての」構造Als-Strukturをもつものではない。「寧ろVor-Strukturとしてすでに気分的に判つてみながらうまくゆかないのである。そして練習の後に始めて『……として』はつきり判る」。「実存的气分的性格」は、これら「二つの構造の中間構造」である。先の集団的実存的性格とは対照的に、この実存的气分的性格に関する議論では、個人のみが注目されているように思われる。だが、「お互いに緊つて行かう」といった挙例を考慮すると、必ずしもそうではないことがわかる。

「スポーツ気分の構造」で中井は、ハイデガーの名を挙げ<sup>29</sup>、時に実存という言葉を用いて、様々な性格を論じている。ただし、これらのハイデガー哲学に由来する邦訳語については九鬼周造の「講義」と岩波講座『実存の哲学』に「負ふ」とも中井は述べている<sup>30</sup>。このことは、中井における「性格」論の背景を考える上で考慮すべきことのひとつである。

#### 4. 生きている空間と映画

映画をめぐる書かれた「物理的集団的性格」では、集団や機能概念が重視される傾向があった。これに対して、スポーツをめぐる展開された「集団的実存的性格」論では、機能論というよりは存在論的思考をその主たる背景としている。ただし、カッシーラーとハイデガーという対

<sup>28</sup> 中井正一「スポーツ気分の構造」『思想』1933年5月号、97頁。

<sup>29</sup> 1930年に発表された中井の「文学の構成」でも、ハイデガーに言及しつつ、距離や性格が論じられる。

<sup>30</sup> 九鬼周造『実存の哲学』岩波書店、1933年。

極の間に「連続せる曲率」を見出そうとする姿勢を中井はもっているため<sup>31</sup>、彼の諸論考では、機能論と存在論の双方が展開されることもある。これらを考慮すると、物理的集団的性格論にせよ、集団的実存的性格論にせよ、機能論ないし存在論的思考のいずれかのみに関連づけることはやや単純化した捉え方であるといえる。例えば、物理的集団的性格論の系列に結びつく傾向のある映画に対して存在論的な議論がなされることもある。その一例が戦後に展開された映画空間論である。

戸坂潤が科学論の領域で空間論を執筆したのに対して、中井正一は、言語<sup>32</sup>や芸術の領域、例えば演劇や映画に関連して空間を論じている。中井の議論の前提は、「生きている空間」であり、単なる間隔としての空間ではない。それは「あるべき位置」との「距離」としての、あるべき位置にいる自分から離れている「不安としての空間」である<sup>33</sup>。中井は、この不安としての空間という見方から芸術を論じるのみならず、個人ではなく集団の次元で議論を展開しつつ、映画を論じる。「映画の場合は、その見る眼はレンズであり、それを描くものはフィルムであり、それを構成するものは委員会である時、この集団的性格との間の距離の上に成立していると考えられるのである」<sup>34</sup>。芸術的空間の論じられたこの短い一節では、映画を製作する集団（と観客）、そして物質的媒体（レンズとフィルム）の主題が、「距離」の問題と関連づけられている。ただし、この「生きている空間」という論考では、中井は、「不安と怖れ」によってではなく「自分自身を否定の媒介とする」という見方によって「個人より集団への飛躍」が成立すると述べている。

## 5. 委員会と（しての）性格

「性格」という言葉に注目して中井の論考を再読した場合、映画論の系列となる物理的集団的性格論とスポーツ論の系列である集団的実存的性格論が顕著なものとして浮かび上がると筆者には思われる。前者の場合、中井が集団的芸術のモデルとして映画を位置づけたことによって、物理的集団的性格論は集団の思考をめぐる論考とも関連をもつようになる<sup>35</sup>。例えば、中井の論文「思想的危機に於ける芸術並にその動向」では、「集団的性格」ないし「集団的組織」という用語に加えて「集団的機関」という語が用いられて議論が展開される。それは「レンズを眼とし、委員会を決意とし、企画をその夢想とし、統計をその反省とするところの一つの利潤的集団的機関である」<sup>36</sup>。この論考で提示されるのは「個人主義」と「集団主義」の対比である。個人における記憶や構想、(心身の)技術や個性、思弁と反省に対応して、集団における記録や企画、技術(機械、組織、統制)、性格、委員会、批判会からなる理論的モデルが示された。こうして、「個性」と「性格」という用語は、個人と集団を対比する図式のなかに位置づけられることになる。

中井の論考において、メディアを介した知覚の問題ないし物理的集団的性格論の系列を辿っていくと集団の思考ないし委員会をめぐる議論に遭遇する<sup>37</sup>。

<sup>31</sup> 中井正一「ノイエザツハリツヒカイトの美学」『美・批評』1932年5月号、5頁。

<sup>32</sup> 「文学の構成」などで展開された中井の言語空間論も重要な問題を提示している。中井は、主張と確信、発言と聴取、意味の充足と拡張といった対比を組み合わせつつ、ハイデガーに由来する性格的隔離性の問題を論じている。

<sup>33</sup> 中井正一「生きている空間——映画空間論への序曲」『中井正一全集3』美術出版社、1981年、211頁。

<sup>34</sup> 同書、215頁。

<sup>35</sup> 論文「意味の拡張方向並にその悲劇性」で中井は、言語活動の隠喩としてラグビーを論じたことがある。その意味では、スポーツをめぐる中井の議論が集団的思考をめぐる議論に示唆を与える可能性もあるかもしれない。なお、中井における隠喩としてのラグビーについては以下を参照。門部昌志「集団／身体／言語活動」、『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』第7号、2006年。

<sup>36</sup> 中井正一「思想的危機に於ける芸術並にその動向」『理想』第35号、1932年、133頁。

<sup>37</sup> 逆に集団の思考ないし委員会について考えることによって、メディアを介した知覚の問題につきあたるともいえる。

「今や、歴史的段階は、個人的意識段階を乗り越えて、集団的意識段階に向いつつある。射影機構は、機械的技術を中に含めて、レンズ、フィルム、電話、真空管、印刷等の機構を貫いて、物質的感覚とも云うべきものが、集団人間の感覚として、表現、観照の要素となりはじめた。それ等の感覚要素を素材として委員会と云う近代的集団思惟の機構は、個性単位の意識を越えたる新たなる性格を、人間社会に導入するに至った」<sup>38</sup>。

「物質的感覚」ないしメディアによって媒介された知覚のあり方が「集団人間の感覚」であるならば、それは委員会にも関連することになる。1930年代初頭における物理的集団的性格の議論は、先の引用部分では、戦後の中井によって、「物質的感覚」や「委員会と云う近代的集団思惟の機構」の議論へと整理され、議論が発展させられている。かつての「集団的性格」という語に代わって「集団思惟の機構」及び「新たなる性格」といった言葉を併用しつつ、集団的な意識と思考のあり方が論じられている。

では、中井の論文「委員会の論理」では「性格」という語はどのように用いられているのだろうか。「委員会の論理」では、「性格」という語は、合理性や論理、概念など、抽象的なものに対して用いられている。例えば、上篇（一～五）で論じられた各時代の合理性ないし論理の「性格」が中篇の冒頭で言及される。また、「それぞれの文化が残す性格」が転化することによって、「委員会の合理性を築いてある」など<sup>39</sup>、僅かながら、重要な箇所で「性格」という語が用いられることもある。そして下篇になると、現代における概念のあり方として専門化の進行と大衆化が論じられ、「概念の専門性の性格」、「概念の大衆的性格」、「概念の商品的性格」、「無批判性の性格」などが言及される<sup>40</sup>。「委員会の論理」では、概念論の文脈では「性質」という語が用いられており、「性格」との使い分けも意図的になされているようである。

## 6. 「存在の諸性格」と「芸術的存在」

中井の論考に見られる「性格」という語の用法のうち、顕著と思われるものを検討してきた。これまでの議論は主に『中井正一全集』に収録された論考を対象としているが、必ずしも全ての用例を網羅的に検討したわけではない。というのも、性格論は、多様な対象に対して展開されうるために、全用例を紹介することは、議論の焦点を拡散させるからである。そのことから、本稿では、中井の性格論における顕著な議論を取り上げて論じることとした。もっとも、本稿における用例の選択ないし絞り込みについては恣意的との批判も充分ありうるものと思われる<sup>41</sup>。

しかしながら、その場合でも、これまでの言及範囲は『中井正一全集』に収録された論考の範囲内に限られている。もし、全集のみならず、中井の直筆草稿やメモ段階の資料を含めるなら<sup>42</sup>、

<sup>38</sup> 中井正一「芸術に於ける媒介の問題」、『思想』1947年2月号、38頁。

<sup>39</sup> 中井正一「委員会の論理（中）——一つの草稿として——」、『世界文化』1936年2月、16頁。

<sup>40</sup> 中井正一「委員会の論理（下）——一つの草稿として——」、『世界文化』1936年3月、16-21頁。

<sup>41</sup> 文字通り、人間の性格を論じた論考（気質論、矛盾的性格論）は、本稿ではやや周辺のなものとして取り扱っている。

<sup>42</sup> 草稿やメモなどの中井関係資料についての概略は次の解説を参照。福家崇洋「〈資料解説・目録〉中井正一関係資料」『京都大学大学図書館研究紀要』12号、2014年。

空間<sup>43</sup>、美<sup>44</sup>、委員会<sup>45</sup>など様々な対象が、「性格」という言葉によって論じられていたことを確認できるはずである。ただし、草稿やメモ段階における資料は<sup>46</sup>、極度に簡潔に要約されたものも多い。たとえ文章化されている場合でも断片的であったり、簡略化された手書き文字が判読しにくかったりなどといった事情もある。直筆の草稿やメモを読むことそれ自体が容易ではない<sup>47</sup>。仮に特定の草稿やメモを読み得たとしても、中井の性格論に関わる記述は多岐にわたり、焦点を絞る必要性も生じてくる。さて、筆者は、これまで中井の性格論に関する未刊行資料を参照するなかで「存在の諸性格」と呼ばれる構想メモと出会った<sup>48</sup>。そして、資料を読み込むうちに、それが『美学入門』の一部分と、さらには、「美学概論」(『中井正一全集2』所収の講義聴講者ノート)と内容的に重なることが判明した<sup>49</sup>。もっとも、一方では、簡略化された構想メモを中心主題として他の文献の支えなしに論じることは、解釈の幅が大きくなるため、困難が大きいと思われる。他方、文章化されていたとしても講義聴講者ノートの扱いは容易ではない。そこで、以下では、主として『美学入門』第二部「六 芸術的存在」を中心に読み解くこととし、重要な論点に関しては、適宜、「存在の諸性格」と題された直筆のメモや講義聴講者ノート(「美学概論」)に言及することにした。

まず、『美学入門』の「六 芸術的存在」冒頭で、多様な「存在」を分けることの理由が述べられる。普段、「存在」といってすませているが、「分けて」考えるのであれば、混乱に陥る。そのため、「整理」して考えようというのである。

第一に、自然の存在について述べられる。『美学入門』では、「a可能としての存在」、「b現実としての存在」、「c生物としての存在」に分けられている。

まず、「a可能としての存在」とは、例えば、三角形や正方形、さらに数字など、「頭の中でたゞ考えられるだけの存在」である。現実の直線には幅があるが、頭の中で「幅のない直線」を考えることはできる。可能としての存在の世界は、実験を必要とせず、可能か不可能か「だけを疑問とすればよい世界」である。

先の「a可能としての存在」が数学的存在だとすれば、次の「b現実としての存在」は、物理学的存在である。物理学の学説が現実であることを証明するには、「実験」による証明が必要となる。したがって、「現実としての存在」は、「それが現実であるか否かを問うところの世界」の存在である。

そして「c生物としての存在」がある。この場合に問題となるのは「成長」や「新陳代謝」である。それらは「物理学的存在」にはない「動き」であるとされる。何かが現実としての存在で

<sup>43</sup> 戸坂は「性格としての空間」を論じており、中井の構想メモにも、「空間性格」など空間に関わるものがあるが、本稿で論じることはできなかった。

<sup>44</sup> 「現代美の諸性格」というメモでは「事実感、組織感、生産感、集団美……機械美、スポーツ美、映画美」などの論点が列挙されている(難読字については著者の推測及び省略を含む)。「現代に於ける美の諸性格」(活版)では、雑誌『理想』の表紙に中井の論文五篇のタイトルが加筆され、単著『近代美の研究』の目次原型となっている(うち一篇「新しい美と世界観」のタイトルは一重線で抹消)。

<sup>45</sup> 「委員会の歴史的 성격」と題されたメモでは、ギリシャの議会やローマの会議などの歴史的事例から、国際連盟など現代の事例までが簡潔に列挙されている。

<sup>46</sup> なお、草稿の生成論的研究については、松澤和宏『生成論の探求』名古屋大学出版会、2004年参照。ただし、本稿では、生成論的視点を中心にした議論展開をする方向には向かわなかった。

<sup>47</sup> 未刊行の草稿やメモなどの執筆年代は、内容や原稿用紙などによって、およその推定が促されるとはいえ、正確に確定するのは難しいと思われる。

<sup>48</sup> タイトルの書かれるべき場所に「存在の諸性格」と記されたメモがある。なお、論点を書き留めたメモというよりも論文に発展する構想を含んだより複雑なメモを、本稿では構想メモと呼ぶこととする。

<sup>49</sup> 技術と芸術については「芸術における媒介の問題」が、存在の三つの区別については、未刊行資料のメモ「(論理の諸性格) … [芸術的存在]」などが部分的に関連すると思われる。

あっても、生きている限りにおいてのみ生物としての存在となりうる。この世界で問題となるのは「生きているか否か」、これのみである。

このように、『美学入門』の「六 芸術的存在」において、「自然の存在」は、「a可能としての存在」、「b現実としての存在」、「c生物としての存在」からなるとされる。中井の構想メモでこれに部分的に対応する議論は、「(A) 可能存在」(可能・不可能)、「(B) 現実存在」(現実・非現実)、「(C) 必然存在」<sup>50</sup> (必然・偶然) 等と記された、一頁の前半部分にあたる。『美学入門』の先のセクションと比較した場合、存在間の「交互作用」の可能性が示唆されている点が、「存在の諸性格」と呼ばれるメモの特徴である<sup>51</sup>。

第二に、先に議論した自然の存在に対して提示されるのは、技術の存在である。自然の世界では、「可能か不可能か、現実か非現実か、偶然か必然か」が問題となる。これに対して、技術の世界では、これらの対立が揺るがされることとなる。技術によって、自然の世界で不可能なことが可能になり、これまで非現実であった事柄が現実のものとなるのである。逆に、現実であった事柄が技術によって非現実と化すことも考えられる。「ダイナミックに可能と不可能、現実と非現実、偶然と必然の色々な存在を転換せしめるところに人間の技術的存在の意味があるのである」<sup>52</sup>。このように、技術という存在を論じる際、中井は機能概念に由来する相互転換の論理を技術論へと応用しており、それは自然の存在と鮮やかな対照をなしている。

二分法的に捉えられた自然の世界に対置されたのは、転換を可能にする技術の世界である。技術の世界には、「創造の自由」があるが、それは誤りをおかす危険性も伴っている。技術の世界では、誤りを「踏みしめる」ことで真実に接近するようなあり方が特徴的に現れている。換言すれば、技術的存在の世界では、実験ないし実践を通じて、可能と不可能、現実と非現実、偶然と必然という対立を超えて、新たな世界が生み出されていくのである。

自然の存在と技術の存在に加えて、第三に問題となるのが芸術的存在である。芸術の世界ではギリシャ神話のなかに飛ぶ人間が出現するが、技術の世界では、1800年においても飛ぶ人間は現実ではなく、20世紀における飛行機の誕生によって、ようやく飛ぶ人間が現実となった。このように、技術において「苦心の末」に生み出されるものがあるとすれば、芸術の世界では、「何の苦もなく、一挙に、そこに到達する」ことがある。技術の存在と比較した場合、芸術の世界の特徴は、「創造の自由」をもつ技術の世界より「さらに自由な世界」だということである。そのため、芸術の創作者が誤った場合、その誤りは技術よりも数十倍の誤りとなると中井は考える。1951年の『美学入門』で中井は、芸術の政治利用に対する懸念を表明している。中井によれば、芸術的存在の世界は、芸術の政治利用をめぐる芸術家間における一種の戦場であり、「芸術の歴史は、この惨憺たる焼跡に外ならない」。

標題を指し示すと思われる部分に「存在の諸性格」と書かれた一枚の構想メモがここにある。一見したところ、自然の論理、技術の論理、芸術的存在が並列的に論じられつつ、芸術論に収斂するような構成になっている。これに対して、『美学入門』で内容の重複する箇所を見ると、セクションのタイトルが「六 芸術的存在」となっており、芸術が強調されている。その一方で、『美学入門』では、芸術の存在についての記述は極めて簡潔である。

芸術的存在についての記述に関しては、「存在の諸性格」と題された構想メモでは様々な芸術

<sup>50</sup> 「美学概論」では「偶然存在」と呼ばれている。『中井正一全集2』美術出版社、1981年、331頁。

<sup>51</sup> また、(A) 可能存在、(B) 現実存在、(C) 必然存在のそれぞれに対して補足的に「である」、「がある」、「いきる」と記されており、四角の部分は赤い色で強調されている。

<sup>52</sup> 中井正一『美学入門』河出書房、1951年、127頁。

の流派が列挙されているだけである<sup>53</sup>。これに対して『美学入門』では、芸術の政治利用をめぐる芸術家の相克など、政治的な観点が前景化されていた。一方、『中井正一全集2』所収の「美学概論」では、「芸術的現象」と題されたセクションが別に設定され<sup>54</sup>、芸術的現象それ自体が、可能存在、現実存在、偶然存在を取り扱う芸術へと区別されている。その上で、古典主義、自然主義、浪漫主義の芸術が、さらにヒューマンイズムの芸術が論じられている。構想メモでは名前が言及されるだけであった芸術の流派が「美学概論」で論じられる。「美学概論」は、「存在の諸性格」（構想メモ）を補足する内容を含む一方、『美学入門』ではカットされた難解な議論をも含んでいるようである。

## 7. 結語

本稿では、一般的な意味とは異なる仕方では「性格」という語を用いた中井の議論を辿ってきた。筆者にとって顕著と思われた一つの議論は「スポーツ気分の構造」であり、集団的実存的性格をめぐる議論である。それと同時に興味深いのは、時代を経て複数の論考で断続的に発展させられた物理的集団の性格論である。人間と機械の複合を通じて物質的感覚が人間に浸透するという、メディア論的思考を先取りした物理的集団の性格をめぐる議論は、「集団思惟の機構」など、「性格」とは別の用語を加えつつ、委員会ないし集団の思考をめぐる議論に接続され展開されてきた。また、「性格」という特殊な用語の変更のみならず、「集団的性格」の意味変更を試みた形跡が中井の「かたぎ氣質」論に見いだせる<sup>55</sup>。中井における性格論は、全集未収録の草稿やメモでも散見される。だが、それらは単独では扱いの難しい資料が多いのも確かである。比較的まとまった「存在の諸性格」と題された構想メモ、また、これと内容の重複する『美学入門』の「六 芸術的存在」では、他の性格論では後景に退きがちな相互転換の発想が技術論として応用されていた点で興味深い例となっている<sup>56</sup>。その一方で、相互転換の議論によって自然的存在と技術的存在、技術的存在と芸術的存在との対比が浮彫にされてもいるのである。

## 付記

引用にあたっては旧字体を新字体に直している。

<sup>53</sup> 構想メモでは「A シュプレマチスムス、B 自然主義、C ロマンチシズム、D リアリズム」と書かれているのみである。「美学概論」の6では、これらの芸術流派が論じられている。

<sup>54</sup> 「美学概論」の5は「美の本質—芸術的存在」であり、6が「芸術的現象」である。

<sup>55</sup> 辻部の意味とは異なる、文字通りの集団の性格を論じた論考が「かたぎ氣質」である。

<sup>56</sup> 機能概念に由来する相互転換の思考の技術論への適用は「委員会の論理」でも試みられている。

## 8. 年表 三木、戸坂、中井、辻部における「個性」と「性格」論の展開

- 1920年5月 三木清「個性について」『哲学研究』（『三木清全集第一巻』岩波書店）
- 1922年1月 三木清「個性の問題」<sup>57</sup>『哲学研究』第70号（『三木清全集第二巻』岩波書店）
- 1927年8月 戸坂潤「性格としての空間」『思想』第72号（『戸坂潤全集第一巻』勁草書房）
- 1928年11月 戸坂潤「『性格』概念の理論的使命——一つの計画について——」『新興科学の旗のもとに』第1巻第2号
- 1928年12月 三木清「有機体説と弁証法」『新興科学の旗のもとに』第1巻第3号（『三木清全集第三巻』岩波書店）
- 1930年2月 中井正一「機械美の構造」『思想』第93号
- 1930年 中井正一「文学の構成」『新興芸術』第4号5号
- 1930年6月 戸坂潤『イデオロギーの論理学』鉄塔書院。
- 1930年7月6日 中井正一「集団美の意義」『大阪朝日新聞』（『中井正一全集2』美術出版社）
- 1930年8月 中井正一「戸坂潤著『イデオロギーの論理学』（書評）『哲学研究』8月号（『中井正一全集1』美術出版社）
- 1930年11月 中井正一「機能概念の美学への寄与」『哲学研究』第176号
- 1931年3月 辻部政太郎「集团的性格の断片」『美・批評』3月号
- 1931年5月 中井正一「物理的集团的性格」『美・批評』5月号
- 1932年1月 中井正一「かたぎ氣質」『美・批評』1月号（『中井正一全集2』美術出版社）
- 1932年9月 中井正一「思想的危機に於ける芸術並にその動向」『理想』第35号（『中井正一全集2』）
- 1932年11月 戸坂潤『イデオロギー概論』理想社
- 1933年5月 中井正一「スポーツ気分の構造」『思想』5月号（『中井正一全集1』美術出版社）
- 1936年1-3月 中井正一「委員会の論理——一つの草稿として——」（上・中・下）『世界文化』
- 1936年5月 戸坂潤『日本イデオロギー論』白揚社。
- 1937年9月 中井正一「集团的芸術」『プレスアルト』第9号（『中井正一全集2』美術出版社）
- 1947年2月 中井正一「芸術に於ける媒介の問題」『思想』275号（『中井正一全集2』美術出版社）
- 1948年1月 中井正一「三木君と個性」、『回想の三木清』三一書房（『中井正一全集1』美術出版社）
- 1950年11月 「レンズとフィルム——それも一つの性格である」『シナリオ』11月号（「物理的集团的性格」の改稿）（『中井正一全集3』美術出版社）
- 1951年1月 中井正一「生きている空間——映画空間論への序曲」『シナリオ』1月号（『中井正一全集3』美術出版社）

<sup>57</sup> 論文の冒頭で、三木は、個性の問題を論じるにあたり、「特殊の問題」から出発する。ただし、特殊が普遍に還元される場合には特殊の問題は存在しない。したがって、特殊が普遍に還元されない場合に特殊の問題が成立し、それが個性の問題を考える出発点となる。「個性の問題は特殊の非合理性の問題に始まる」。この後、三木は「非合理的な特殊を合理化する合理性は何であるか」を問題とする。論文の前半部分で、歴史主義、普遍妥当的価値の観念、具体的普遍の観念によって個性の問題を基礎付けうるかが検討され、いずれも限界が指摘される。論文の後半で、神、人類の理念、叡知的性格が部分と全体の関係として論じられる。このように、三木は個性の問題に関する研究から出発した。彼が、個性論の批判を含む戸坂の性格概念論をどう読んだのか。その手がかりの一つとなるのが、『新興科学の旗のもとに』に掲載された、三木の「有機体説と弁証法」である。具体的普遍など、「個性の問題」を想起させる部分もあるが、マルクスへの言及が特徴的である。

## 9. 参照された資料<sup>58</sup>

- 「物理的集团的性格」〔原稿断片〕
- 「委員会の歴史的性格」〔メモ〕
- 「映画に於ける物理的集团的性格」〔原稿断片〕
- 「空間性格（観念形態）…」〔メモ〕
- 「投票の存在的性格」〔メモ〕
- 「論理の諸性格」〔メモ〕
- 「存在の諸性格」〔メモ〕
- 「近代美の性格（一）」〔メモ〕
- 「現代美の諸性格」〔メモ〕
- 「日本的否定的性格」〔メモ〕

---

<sup>58</sup> 京都大学大学文書館所蔵の資料を参照（電子ファイル）。直筆の草稿や構想メモ等でも、標題と思われる箇所では「性格」という言葉が用いられた資料が幾つかある。